

築地外国人居留地

レンガ造りの街並みには、ピアノの音が流れ、パンを焼くにおいが漂っていた。明治初め、現在の中央区明石町には、外国人しか住めない「築地外国人居留地」があった。この約10秒の小さな街は、関東大震災で壊滅。今は面影すら残っていないが、近代文明発祥の地ともいわれる街の記憶を残そうと、地元の人たちが地道な活動を続けている。

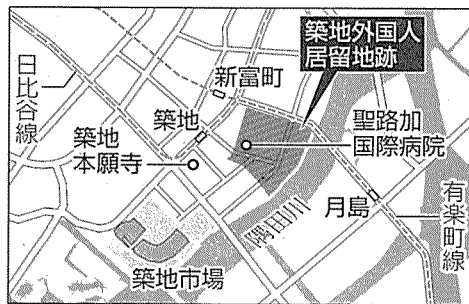
東京の記憶



水野雅生 (78) 写真
〓はそう解説する。

「居留地に移り住んだ外国人宣教師や商人によって、近代のあらゆる文化が日本にもたらされた」。NPO法人築地居留地研究会の理事長、水野雅生(78) 写真 〓はそう解説する。ホテル、靴製造、電信事業、指紋研究……。中高層のビルが立ち並ぶ街の中には、数々の「発祥」を伝える石碑が立つ。地元生まれの水野自身が営む印刷業の源流もここにある。

近代日本生んだ街



1873年(明治6年)、後に平野造船(石川島播磨重工業の前身)の創業者になる平野富一が活版製造所をつくった。これをきっかけに、築地や銀座には、印刷業者や出版社、新聞社が

軒を連ねるようになった。居留地が生んだものは、産業にとどまらない。立ち並ぶ洋館から流れてくるピアノの調べに心を奪われたのは、少年時代の山田耕筲(1886~1965年)だ。山田は「あれが私を作曲家にした」と、自伝で打ち明けている。

現在、この地域のランドマークになっている聖路加国際病院も、米国聖公会が、当時の居留地内にあった立教大に薬局兼診療所を開いたことが始まりだった。こうした歴史的意義を伝えるため、1990年に地域住民らが研究会を設立

し、2007年にNPO法人化。その後、初代の代表者が引退すると、活動は一時下火になったが、「居留地の歴史を埋もれさせてはならない」と、水野が研究を引き継いだ。以来、研究者らを招いた勉強会を隔月で開催し続けている。

築地の居留地は、江戸幕府が欧米列強と結んだ「安政五ヶ国条約」に基づき、横浜、神戸、函館などに続き、1869年1月に開設された。治外法権が認められ、キリスト教の宣教師や商人ら最大300人余りが住み、9か国の公使館や教



シェルトン、1980年に叔母から見せられた曾祖父の日記を読み、キリスト教の伝道にささげた先祖の生涯を知った。

シェルトンは、1980年に叔母から見せられた曾祖父の日記を読み、キリスト教の伝道にささげた先祖の生涯を知った。外交の仕事に携わっていたシェルトンは、日本との懸け橋になろうとした曾祖父に共感し、伝記を書こうと決意。2000年頃、取材のため、曾祖父がかつて教べんを執った同大を訪れた際、中島の案内で居留地跡を巡った。居留地のモノクロ写真を見た際には涙を流し、曾祖父ゆかりの地を研究する中島らに感謝を伝えたという。

住民勉強会 歴史を継承

会が集まる「日本の中外国」となった。ここは立教、青山学院、雙葉など日本を代表するミッションスクールのふるさとでもある。



中島健二 (69) 写真 〓は「米英の宣教師たちは、学校を通じてキリスト教を日本に伝道しようとした」と、背景を説明する。

その一つ、明治学院大で客員教授を務める中島健二(69) 写真 〓は「米英の宣教師たちは、学校を通じてキリスト教を日本に伝道しようとした」と、背景を説明する。

近代史が専門の中島は同大の歴史を調べる過程で、居留地の研究を始めた。その縁で、かつて居留地で暮らした米国人宣教師アレキサンダー博士のひ孫で、同

国で暮らすシヨアンナ・R・シェルトン 〓写真 〓に出会った。

1906年頃に撮影された現在の中央区明石町付近。神学校や洋館が立ち並び、居留地時代と変わらない風景が残る(出典「二十世紀の東京」)

1899年の条約改正により、居留地は廃止される。残されたエキゾチックな街並みも、1923年の関東大震災で全て失われた。築地の居留地の知名度が低いのは、当時を物語る建築物が残されていないからでもある。「だからこそ、一人でも多くの人に興味を持ってもらい、居留地の歴史を未来に引き継いでほしい」。水野は期待を込めて語った。(敬称略、前田遼太郎)